



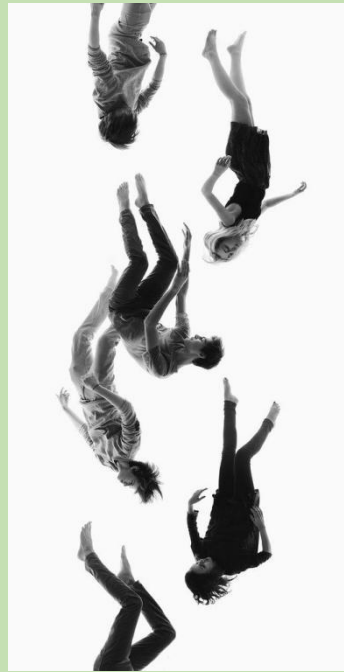
多谷昇太

中空（なかぞら）いっぱいにかかった蜘蛛の巣の糸が崩れながらイブの身体に絡みつき、これを空中へと浮かび上がらせる。そしてそのまま中空の彼方へと、どこか知らぬ別次元の彼方へとイブを連れ去るように思われた。イブは懸命にその絡みついた糸を剥がそうともがいている。しかし叶わないことを知るや自分を連れ去ろうとする魔王に向かって「わたしは絶対に、絶対に！この人に添い遂げてみせる！××や××をして、この人の願いを必ず成就させてやる！絶対に負けないぞーっ！」と絶叫するのだった。この××で伏したことは、イブが云わんとしたことは俺にはほぼ瞬間的にその意味がわかったのだが、それを言葉で表そうとすると無理がある。それは想念伝播とか霊界言語とも称すべき、当人同士の意識から意識へと直接的に伝播されるもので、ちよつと三次元世界の言語では表現不能なのだ。しかしそれは非常に強烈な意識の表象なのであり、俺はイブの健気さに「ありがたさ」に忸怩としてまったく歯を食いしぼる思いだ。「ちくしよ、ちくしよ、魔王め。俺のイブに手を出すな。連れ去

るなーっ！」とこちらも絶叫したいのだが声すらも出ない。俺の身体にも蜘蛛の糸が絡みついて俺を金縛り状態にしているからだ。そのうちにイブは一声「あーっ！わたしの王様ーっ！」と悲鳴を残して中空の彼方へと連れ去られてしまった。直後に姿はまったく見えないが魔王の笑い声が中空に響きわたる。「うぬの実態の世界へと落ち行け！うぬの意識を保てるかどうか、貫けるものなのか：とくと思い知れー！」と、強烈な想念が恫喝のごとくに伝わってくる。それは全身がいついで萎えるほどのドスの効いたもので、それだけで魔王の何たるかを思い知らされるものだった。その強大な想念の力に圧倒されるままに俺の意識が急激に薄れて行く。ちくしよ、とてもかなわない：と心中で呻吟しながら俺の意識は果てた。

気が付くと俺は薄暗い洞窟のような所を歩いていた。ここはいつたいどこなのか：最前のイブや魔王のことなどいっさい頭になく忘却している始末。洞窟の幅は3メートルほどで高さもそれくらいある。明かりはどこから来ているのかわからないが薄暗いだけで視覚は充分あった。10メートルほど先で洞窟が交差している。どこか第二次大戦末期における軍の地下兵站か兵舎のような塩梅だがしかしそれとも違うようだ。交差

【落ちる、落ちる：俺もイブも誰もかも！魔王の力の前に人間など…】 ← From pinterest



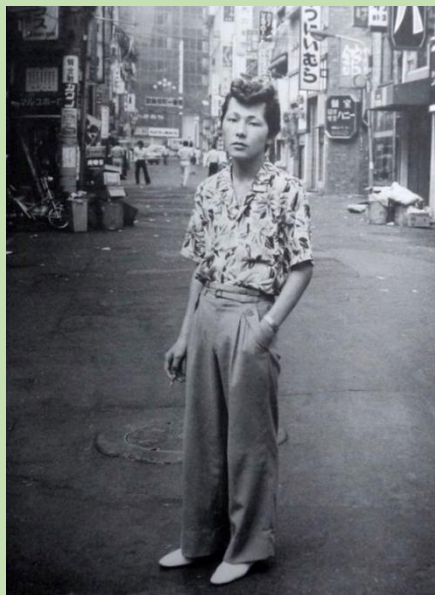
していると、左に曲がってちよつと行くと右側の洞壁に穴が抉られてあり人の気配がする。中を覗くと十帖ほどの広さがあった中央に置かれた長テーブルを囲んで10人ほどの労働者風の男たちがタバコを吸いながら雑談している。ヤニ中毒だった俺は途端に喫煙願望をもよしポケットからわかばを取り出す。なにくわぬ顔で中に入ろうとしたが男たちにいっせいに注視され、そのガラの悪そうな陰険な視線に辟易としてそのままそこを通り過ぎた。途端に男たちが野卑な笑い声を上げた。ちきしよう、嫌な感じだ。しかしそれなら洞窟内のどこでも喫煙すればいいのになぜか所定場所以外での喫煙は憚られた。得体の知れぬ強要

と強迫の意識が洞窟内に充滿していて俺の自由を束縛し、それ加うるに心に恐怖感を植えつけるようなのだ。その出所まではわからなかったが。しばらく進むうちに今度は左側にさきほどよりは小さな窪みがありスタンド灰皿が垣間見える。しめたとばかり中に入ったがそこにも2、3人いて「何だ、てめえは」とでも云いたげに眼付けされる。とてもモクを吹かせる雰囲気じゃない。そこも吸わずに立ち去る。「フン」という冷笑を身のまわりに感じ「まずタバコだろうが？おのれは何でもだ。すべてはそれから。ふふふ：だからまずそれからして、させぬぞ」なる悪想念を感じた。しかし確かにそうだった。何者か知れないが俺にまとわりつく悪想念の指摘通りのこと、俺は何でもまずタバコだった。そうなった分けはジャストころづくしの（古語・至って儘ならない、色々と気を揉む）人生だったからだろうし、あるいは真摯な生き方を始めようとするのに都度それを目眩ましにし、猶予の思いを抱かせ、身に付いた悪癖のゆえだったかも知れない。とにかくその「まずタバコ」ができない苛立たしさにもうひとつ、俺の持つ弱点への挑戦が加わったようだ。新たに現れた十字路を今度は右に曲がった途端目の前にいきなり一人の男が立ち塞がった。25、6才くらい

のチンピラ風の男だったがやけに下出にこう聞いてくる。「すいません、1円貸してくれませんか？」え？1円？…1円とは何だ。こいつ俺を馬鹿にしてやがるのかと腹が立ったが「いや、あいにく金銭を一切持ち合わせてないので貸せないよ」と答えてやる。すると今度は「1円もない分けないでしょ？」と云いざま寄って来ていきなり俺のズボンのポケットに手をつ突っ込んで来る。さすがに堪えかねて男の手を取ると上に折り曲げその肘の内側に俺の手を差し込んでアームロックをかけてやる。昨今流行の格闘技で見た技だ。しかし全然効く様子もなく男は「それはねえだろ？」と凄んだあとで足をからめて俺を押し倒そうとする。まさにこの瞬間に俺の「弱点」が来た。それは恐怖心というやつである。育んで来た自分の価値観や生き方がいいつさい通用せず（俺からすれば）非情で不合理なこと甚だしい事象が現れたとき俺は一切を放棄してしまう癖があった。つまりそういう「弱点」があった。それから俺にとって不都合で不合理な事象に対して甚だしい嫌悪感をもよおし、これと対峙するに堪えられないのだ。これがいまいる霊界（魔界）ではなく現実世界のことであつたら文字通り嫌悪感による対象からの逃避となるのだが、ここ霊界においてはなぜかそれが「恐

怖心」となつて現れるのだった。技が効かないと知るや俺はこんなチンピラ風情に猛烈に恐怖心を抱き、見栄も外聞もなく絡みつく男の手足をどうにか掃うと洞窟の奥（だかどうだか知らないが）に向つて闇雲に駆け出した。「待て、このやるーっ！」チンピラが追ってくる。あとでこの光景をカメラで見たら開いた口が塞

いのに？【from pinterest】



がらないだろうという顔をして俺は逃げて行くのだが、今度はその先に行く手を塞ぐように、ランダムな紙の山が突然現れた。洞窟の左右上下いっぱい広がった紙の山はしかしあたかもそこが無重力空間でもある

かのように空中にフワフワと浮いている感じなのだ。かまわずに俺はそこに突っ込む。乱舞する紙の山を両手で掻き分けながらとにかく奥へ奥へと進んで行く。しかし背後からはさきほどのチンピラではなく完全武装した軍隊と思しき一団が追って来る気配がする。これが霊界の不思議なところで見えずともすぐにそうと分かるのだ。そう云えば地獄の恐怖の所以はそれが何であろうと当人が「思えばすぐに現象化する」ということなのだが、そうと思いついたのは後日のことではない。ただただ恐怖の虜そのものでしかなかった。このザマをもしミキやイブが見るならばさぞや俺を見損なうだろうがしかし前言ったようにイブもミキも悉皆失念してしまい、思い出すことさえなかった。人が眠って夢を見るときの夢中では現実の自分をすっかり失って夢中のPTO、シチュエーションにすっかりはまってしまうということも俺は前に云った。で、だからいまがそれなのだ。地獄で恐怖を抱くことほど危険なことはないのだがこの見地からすると俺は100%アウトだった。「閣下！」紙の山中から突然一人の兵士が現れた。旧陸軍の三八銃と思しき銃を捧げ銃（つつ）として「閣下、ここはわたしが食い止めます。このままお逃げください」と上奏するように俺に云う。その顔

は汗と泥にまみれており負け戦の只中にいるような姿である。ただその表情はこの俺を信じている、崇めているとでも云いたげな真摯で必死な面持ちだ。しかし何のことかわからず俺は彼をろくに見もしないで奥へとただ逃れて行く。すぐに彼は紙の山で見えなくなつたが背後から「閣下、ご無事でーっ！」と最後の言葉を送つてよこした。あさましきまでの我が身だけという、自分さえ助かればというザマを露呈しつつ、紙の山を（おそらく今の兵士を簡単に倒してしまうだろう）背後から迫りくる軍団に隠れ蓑にするかのように、掻き分け掻き分け投げつけながら、俺は猪突「猛逃げ」して行く。するとその紙の山から今度は洞窟内のまた新たな十字路と思しきやや開けた場所へと飛び出した。紙の山は背後に乱舞していてそこ以降にはもはやないようだ。そこには10数名ほどの男たちが俺を待つていたかのように整列していたのだが俺はギョツとして、一瞬殺気立った目で彼らを見据えた。この男たちを背後から幾許もなく飛び出して来るだろう追手の軍勢の一味と勘違いしたからだ。しかしすぐに間違いに気づく。彼らは誰も無言で何も云わなかったが見れば竹槍や棒、あるいは三八銃などをそれぞれの肩にかついで俺の指令を待つていようなのだ。つまり俺の味方（も

しくは部下たち」ということだ。なぜそう思うのか自分でもまったく分からないのだが不思議と直感的にそれが知れるのだった。誰も彼もがどことなく俺に似ている気がする。そこには年配者もいれば若者もいて、服装はそれぞれの職業や身分を表すようになってバラバラの姿なのであり、決して一様ではないのだが、それにも拘らず彼らがみな俺の同胞という気がしてならない。その彼らの面持ちにどこか俺を責めるような心象を覚えつつも、しかし同時に死を覚悟したような悲壮観を湛えているのが、なんともやるせない気持ちとなつて察せられるのだった。それを見るに至つて俺はようやく自らの恐怖心（自己保存の心）を些かでも制御し、越えて、彼らを思う心を湧出せしめたようだ。彼らに向つて「あなたがたの（俺を守るといふ）気持ちにはありがたいがしかしそんな貧弱な装備では絶対に叶う相手ではない！（なぜ分かるのか自分でも知れなかつたが）やつらは特別な精強部隊だから：ね？頼みます。おのおの散つて：そしてすぐに逃げてください！ たつた今！」と半ば命令するように呼び掛けた。しかし彼らは互いに顔を見合わせたあとで不服従を示すように首を横にふったりあるいは黙つてうなだれたりするばかり。少なからぬ者の目には涙さえ浮かんで

いた。「閣下」と彼らのうちの年長者が俺に云い他に合図をしたようだ。すると彼らは俺に覚悟を促すかのようにならに捧げ銃をした。「やるのか：仕方がない」俺はそうつぶやいて、もはや彼らと運命を共にするしかないと覚悟をきめた（…のか？）。このとき目には見えぬが最前よりまとわりついて離れない、何者か悪しき想念の主が『ほう：』とばかり、感心したかのようなつぶやきを送つてみせる。もつとも至つて猜疑心いっぱいという感じなのだが：。

さても、その猜疑心への答えはすぐに示されることとなる。隊列の内の誰かが「来た！」と鋭く声を上げる。列がいつせいにバラけて俺が飛び出てきた側の、紙が空中に乱舞している通路に向つて全員が迎撃の姿勢を取つた。俺も両拳（こぶし）を固めて固唾を飲んで身構える。紙の向こうから人間の声とも思えぬ、獣の咆哮としか聞こえない異様な雄叫びが迫つて来た。そして紙の乱舞から飛び出して来たものは：それはなんと人間ではなく獣人どもだつたのだ！ 全身毛むくじやらでその口には牙が生え真つ赤にざらつく目は悪魔そのものだ。それぞれが身長2メートルほどもありモーニングスターやメイス、あるいは大剣などを手にしている。数は（俺の？）部隊と同じ10数人：いや10数

匹ほどか、その怪物どもがいつせいに部隊に打ちかかる。あちらで頭が潰されこちらで首が飛び、剩れ隊員の身体を引きちぎっては貪り食う始末。その様は戦闘と云うよりは一方的な殺戮でありとても直視に堪えない。そのうちの一匹が戦闘に加わらずに離れたところで身体を氷つかせていた俺を直視する。手にしていた血だらけの隊員の身体を放り投げ、口に啞えた腕を吐き捨てると、口から血を滴らせながらにごとか獣語で呪いの言葉を吐きつつ一歩二歩と俺に迫って来た。手にしていたメイスを床に放り投げ「引き裂いてやる」とばかり両手を翳してにじり寄ってくるその様こそは、

↓From pinterest)



【現れた軍勢は人間ではなかった各々凄まじい武器を持ってはいたが悪魔顔をした獣人の群れだった。】
最前より悪しき想念を送ってくる存在そのものの姿とも思われた。『おい、どうした？この通り俺も素手だ。お前の臣下の仇を取ったらどうだ？まさかお前、臣下を見殺しにしてそのまま…』なる想念が物理的迫力を伴って伝わりくる。戦うどころか、俺の膝は震え全身が震えて：畢竟俺は踵を返すと脱兎のごとくに駆け出した。女のように悲鳴を上げながら、ジャスト逃げ出した。恐ろしい、ただ恐ろしい！見栄も義も臣下（：なのか？）を思う心も何もない。あるのは助かりたい、おのれだけが助かりたいという一心だけだ。「ワハハハハハ」あさましき俺の背（せな）に魔王の哄笑が響き渡った…。

また場面転化した。たった今の修羅場が嘘のように俺はどこかの街中を歩いている。ここは：？ああ、鶴見だ。俺がまだ若い頃に隣の川崎や東京の西南地区ともども仕事を転々としながら悶々の日々を過ごした所である。社会的に奥手なのか何なのか、結婚や家庭を持つことも考えずに、笑止な話だがいつか詩人に、作家になりたいとして自分本位な生活を往時は送っていたのだ。定職も持たずに業務請負の仕事を書いたことまったく何枚、いや何十、何百枚履歴書を書いたこと

やら。ふふふ…ん？履歴書…？そして出版社の公募などに送り続けた、あの果てしもなく手書きで書き続けた原稿の数々…？それらの紙、紙の山が、空間に乱舞する光景が一瞬間脳裡をよぎる。何某か鋭い胸の痛みをともなつて。しかし何のことやら合点も行かずそれにしても…と往時の悔恨に思いが戻る。その職場転々の前は俺はなんと2年間もの間、すなわち1990年から1992年にかけて日本を飛び出し世界中を放浪して旅していたのだった。フランスの詩人A・ランボ―に、彼の作品と生き方に憧れ、それをなんと地で行ってしまった分けだ。いくら若気の至りとは云え、それまで勤めていたお堅い役所勤務をおっ放り出していることであり、親も家庭も顧みない自己本位なこの生き方は到底許されるものではなかった。50となった今でも強く人生のしこりとなつて残っている…。ところではそれはそうと、俺はいま家路につこうとしているのだった(※「夢の中」でそういうシチュエーションとなつていた)。かつて通い慣れ歩き馴れた鶴見の市街、さて、えーっと、ここはその鶴見のどこ辺りだっけ？ちよつと先に鶴見川が見えるから…：そうすると駅はさらにその先だとか思つて然るべく歩いて行くのだが、どういふ分けか如何(いっか)な辿り着かない。人通

りも多くなり駅は近いはずなのにその辺りを堂々巡りするばかりだ。次第に気が焦つて来て不安な気分となる。人に道を尋ねようにも行き交うどいつもこいつも余所余所しくて聞く気がしない。「ふん、いい気味だ」『誰がお前なんか…』という表情が誰の顔にもこびりついている。畢竟悪霊の街を行く異邦人のごとし。苦しまぎれに「あーっ！」とか大声を上げそうになる。【通い馴れた鶴見駅←…の筈なのに迷路のごとく辿り着かない。悪夢ならではのシチュエーションだ】



と、その時だった。「きやあーっ！あれ見て！なにあれ？」「え？なになに？うわっ！なんだこいつ。お化けか？：中身は女か？」などなど道行く人々の叫び声は突然上がった。人々の指差す方を見ると確かに異様なものがこちらに向かつてふらふらと、覚束ない足取りで近づいて来るのが見える。それは何と云うか伸縮性のある半透明の、人間大のビニール袋の中に入っている女と云うか、あるいは全身がゼラチン質の膜の中に囲われている女と云うべきか、とにかく、何とも現実離れした異様なものだった！袋の（膜の？）中身はどうやら全裸の女と察せられのだが、その女が時に前方に手を翳しながら苦し気に袋の中で何かを必死に叫び、訴えているようだ。しかし声は膜に遮られて表に出て来ない。行き交う人たちは呆気にとられ気味悪がってその得体の知れないものに（女に）道を譲り近づこうとしない。中には指差してそれを笑い出す奴らもいた。笑うなどとは俺にはもちろん論外だったしかし敬遠するのは俺もまったく同様だった。何かのパフォーマンスでこんなことをしているのかそれとも中にいるのは狂人なのかまったく知れなかったが、こんな突拍子もないものには関わらないという常識は俺にもあった。ただ：袋の中の人物の何事かを訴えるシリアスさだけ

には心が打たれる。まるであの時のイブみたいだなと：ん？イブ？イブって：この瞬間心に稲妻が走った。次元を超えて何かと繋がるような、霊界と現実が結ばれるような：。しかしこの時目には見えぬが俺のまわりで何者か悪しきものが『ちっ』と舌打ちをしたように感じられた。タブーを犯すなど俺に警句を発しているようでもある。それを合図にしたかのように袋の女のすぐ後ろにいたチンピラ風の2人連れの男の一人が【「わたしは絶対に、絶対にこの人に添い遂げて：わたしは、絶対に負けないぞーっ！」とでも叫んでいるような女の姿。そのイメージ。Pinterestから】



© darkmatterzone

「てめえ、目障りなんだよ」と云いざま女を後ろから蹴飛ばした。よろける側にいた中年のサラリーが「来るな！こつちへ！」と云って両腕で強く突き飛ばす。女はたまたらずに地面に倒れ込んだ。それを見るや俺は心にガチッと火が入ったがあらうことか廻り中の通行人たちが一斉に女を笑うのだった。俺は口をあんぐりと開けて「こいつら」を見廻すしかない。何なんだ？こいつらは……。すると例の悪想念が『臆病者め。街中の人間がお前の敵ということだ。どうだ？お前も笑ったらどうだ？あ？すればお前も町衆になれるぞ。ふふふ』と嘯（うそぶ）く。しかし俺は「ああ、そうかよ」と捨て台詞を吐いたあとで先に蹴飛ばしたチンピラの前に立つや否や「おい、この人に謝れ！」と云ったかどうかもわからぬままに左ストレートを顔面に打ち込んでいた。心の中で「助けてよ、田村さん」と云うミキの声が「あーっ！わたしの王様ーっ！」というイブの最後の叫びが響きわたる。霊界と現実が、魂と心と現実が今しも繋がると思われたその刹那チンピラの仲間たちが、突き飛ばしたサラリーが、他にも近くにいた男たちがいつせいに俺に打ち掛かかって来た。俺はフットワークやらダッキングやらを使ってそいつらをかわしかわし、顔面にボディに好きなようにパンチの

【田村の怒りの鉄拳、左ストレート。※photoacのものデルさん】



嵐を浴びせる。云い忘れていたが俺は決して格闘の素人ではない。若い頃他ならぬこの鶴見にあるサクラボクシングジムに在籍していたことがあるのだ。ただしプロのライセンスがある分けではなく単に仕事帰りに練習をしていただけのこと。それなのになぜいま俺はこうも強いのか、正直自分でも合点が行かない。おそ

らく、ほんの刹那ではあっても甦ったイブやミキの言葉が俺をしてかくもスーパーマンにしている気がしてならない。とにかく、そんな俺の強さにひるんだ男たちの隙を見計らって俺は袋の女に駆け寄り、その袋を力いっぱい引き裂いた。しかしその途端に異臭を嗅ぐ。中から現れたのがホームレス然とした実年に差しかかるうとする年配の女性で、その身に纏ったポロ服や体臭ゆえのことだったろう。女性は冷や汗をかけた顔を苦しそうに歪めて、手にした小銭を俺に示しながら「え、駅はどこですか？お願いだから教えてください」と哀訴する。何のことか分からず一瞬虚を突かれる俺を、廻りの男たちや女どもがいつせいに哄笑した。

(…続く)

【スペース余ったので写真一枚。まずタバコ…これが俺の悪癖。何でも兎角ここに逃げる。真摯ならざる”猶予”をここに置いてしまう。その挙句タバコ(人生)の残りがもう少なそうだ…】

